

々棄て難いものだ、着色したる程度に依つては、新たなる印象をとつて全々最初の印象を棄てることもある。

一、寫生中は時々目を静養しなければならぬ、新らしき活眼を以て見る必要である、余り自然に拘束されて、神經に疲労を生ずると、見得べきものも見えず、畫面に齷齪して自然を忘れる憂がある、時々新らしき眼を以て見るときは、其の位置に於て未だ氣付かざりし美を授かることがある、其結果は大なるものである。

一、生命ある自然を見て、機械的に光線や形や色によつて、それで自然の感じや物質を表はさふとためである、ある程度までは全く自然と同化しなければならぬ、所謂無我の境に入つて自然そのものになつて、自然の心情を輸入しなければならぬ、千里眼の様に木皮の中に居る虫までも見る必要はない、自然を機械的に味ふと共に精神的に味はなければならぬ。

一、畫は手で畫くものでない、目ばかりで畫くものでもない、頭でかゝなければならぬ。即ち頭に感じた有様を畫かなければならぬ。

一、小なる誤筆は發見し難く、補筆して以て始めて其の非を解り、其の結果に驚く盲なるかな。

一、我々は幾何學の理を知つて、其の基本たる推理の基礎たるべき公理を知らぬ様なものだ、川の本流を知つて、其の源泉を知らぬ様なものだ、我々は結果を知つて根元を知らぬ、自

然にも、公理となるべき、源泉ともなるべき、自然美の根元が奥深く潜むで居る様だ、我々は逆路をとつて、公理源泉を尋ねるのだ、その幾分は先輩によつて發見されて居るが、起因すべき公理や源泉は、まだ〴〵澤山あるらしい、我々は信仰の力によつてそれらを得むとするのだ、その信仰は積むで以て愈自然美を味ひ、絶對なる自然を眞から味ふことが出来る様になる。

夕陽の大阪月の京都 龜岡 凌風 生

汽車が梅田驛を發したのは、早や夕暮であつた。西の空が金色に輝いて、地平線近くは薔薇色にぼかされて居る。それがあの廣い澱の水に映つて、空も水も燃えたつ様にゆら／＼とする。空はだん／＼綺麗になる。それが水に映るたびに自分は幾回となく胸を躍らせた。

大阪の街は今夕陽に包まれて盛んに立ち昇る煤煙までが赤熱されて夕陽の大陽は眞に美しいと思つた。

さしにも美しかつた夕映も次第に消えて淡紫のゆかしい色と變る。山崎を過ぎた頃フト東を見ればいつの間にか満月が高く蒼空に懸つて居る。京都に近づくとつれて、月と京都とが何となう離すことの出来ぬやうな感がする。東山も加茂川も、さては京都の街も、皆この月に調和するやうに思はれた。

夕陽の大阪、月の京都と幾回も繰返すうちに何となう其中に意味がありそやうなものと夢のやうなことを考へ始めた。

夕陽のあの赤い色は活動的の色である。大阪はたしかに活動に適した所である。

月夜の色青は沈静の色である。京都は静かに遊ぶに適した所である。

大阪に城を築いた豊太閤は、あの夕陽の様に、熱烈な雄大なそして、非常な煩腦性をもつた人であつた。

玲瓏な月の姿、沈静な月夜、これは如何しても女性的である。

京は都の地公達が詩歌管絃の遊びに適した所である。

大阪は夕陽のその如く現實の都、黄金の都である。

京都は月光の如く理想的、空想的超世間的の都である。

大阪は現實的に戦ふによるしく、京都は藝術的生活によるしき所である。

こんなつまらぬ理屈を考へて居る間に汽車はいつしか京都に着いた。

十月九日稿

公設展覽會水彩畫素人評

市街(石川欽一郎氏)臺灣邊の町の通りを描いたのらしい、場中の水彩畫中一番よいと思つた、例の輕快なる筆つかいは到底他畫伯の眞似ねる事出来ぬ所だ、實に色彩の豊富な活氣のある先生獨特のものだ。

燈下(夏目七策氏)常ながら人物の上手なものには敬服の外ない、よく燈下の色が出てゐる、我々素人には悪い處を見出す事出来ぬ同氏の靜物はバックの色と花瓶の色が等しい様で、其れに花瓶

の色彩は品のない色だ。

戸山原(橋本吾一郎氏) 此繪は一度戸山原で描いてゐる處を見た事がある、其時は別に感心はしなかつた、地に生いてる一面に一尺も長い草をどう云ふ風に描くかと思つて居つたが、此處で見ると案外にラクに出来て感じも出てる。

夏の野(森本茂雄氏) 水彩で一風變つた描き方だ、油繪ではこゝろ云ふ描き方はよく有るが水彩では初めてだ、中々面白い、夏の強烈な感じを出すには適してゐると思つた。

白薔薇(鈴木錠吉氏) 花が少し眞の花より堅いと思つたがなかなかよい、清流は之より悪くないかしら。

讀書(赤城泰舒氏) 顔や手はたしかに夏目氏にをとる様に思つた、殊に本を以つてる親指が妙だ。

静けき夕(相田寅彦氏) 氏の三點の内之が一番スキだ、開場してから四日許りより經たないのに最早賣約濟の札が着いてる湖畔は湖の向ふにある山のコバルトが變だ、山水の秋はイヤに暗いキラいな繪だ。

以上の外神の森(吉田ふじを氏)曇り(大橋正堯氏)日没後(榎本滋氏)春(大下藤次郎氏)若松(水野以文氏)などが面白い。

チームス河畔(三宅克己氏)價は非常にたかいが他の繪に比してサツパリ我々には面白味が無かつた、其他未だ大分あるが皆日本洋畫界の繪舞臺へ出るくらいのもだからステキな繪ばかりである。(北畠孚明)